

スマート農機を体系利用した場合の 水稻移植、乾田直播栽培における経済性

スマート農業推進室

1. 背景・目的

スマート農業機械の導入の指標として、①稲作の移植栽培のみ、②V溝乾田直播栽培（以下、V溝乾直）のみ、③両栽培方法で共用した場合の導入に適した経営面積を試算しました。

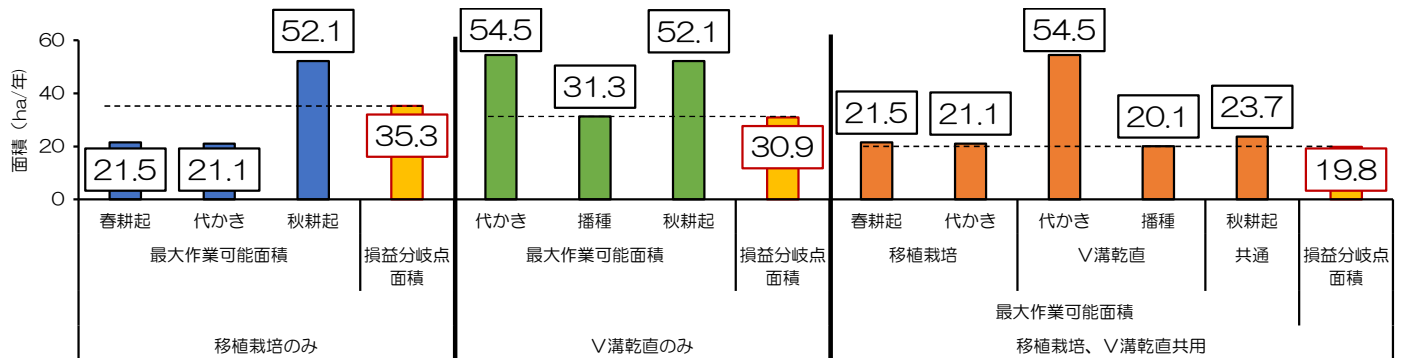


2. スマート農業機械それぞれの経済性

移植栽培のみ、V溝乾直のみ、両栽培方法で共有した場合の、各スマート農業機械の年間当たりの最大作業可能面積（ha/年）※1と損益分岐点面積（ha/年）※2を算出しました。

- ※1 最大作業可能面積：作業期間に作業できる一年間当たりの最大の面積
- ※2 損益分岐点面積：作業請負料金よりも農機を導入・利用した方が経費が安くなる一年間当たりの作業面積

ロボットトラクタ（104ps）



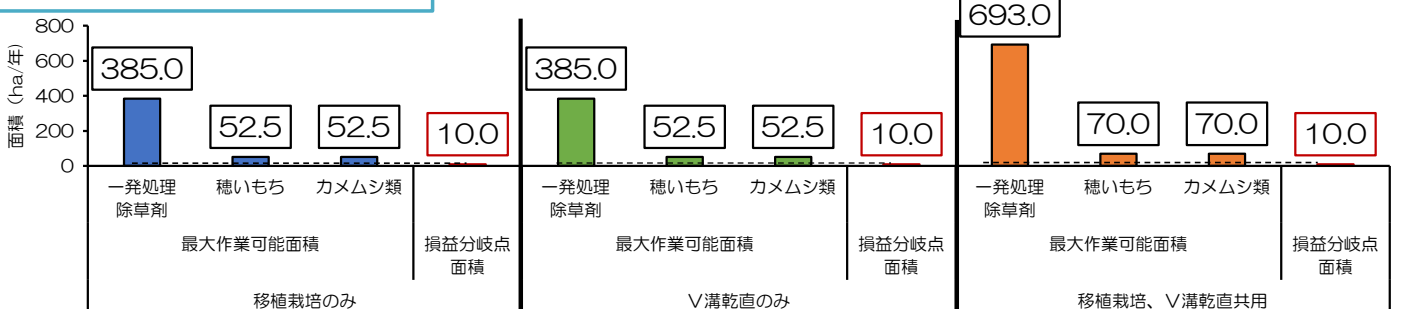
移植栽培のみに利用した場合、春耕起と代かきの最大作業可能面積は損益分岐点面積より小さい

共用することで損益分岐点面積が小さくなる！
移植の春耕起と代かきの最大作業可能面積も損益分岐点面積より大きくなる！

注1 グラフ中の点線は損益分岐点面積を示す（以下、同様）。

注2 移植栽培、V溝乾直の共用は、移植栽培の代かきとV溝乾直の播種は作業期間が重複するため、重複期間は移植栽培の代かきを優先したものと試算

農業用ドローン（搭載量8L）



共用することで最大作業可能面積が増える！

注 一発処理除草剤は自己拡散型剤（250g/10a）、穂いもち、カメムシ類は液剤（0.8L/10a）を散布